

[制作記録]

デンマーク王立美術院での滞在制作及び 北欧における陶磁器表現の調査

Residency at the Royal Danish Academy of Fine Arts
and Survey of Ceramic Expression in Scandinavia

宮永 春香
MIYANAGA Haruka

1. はじめに

本研究は本学のサバティカル研修制度を活用したデンマーク王立美術院での滞在制作を中心としたものである。同時に北欧における陶磁教育や陶磁造形表現、それらに関連する美術表現の動向調査も行った。期間は2023年9月より2024年2月である。

デンマーク王立美術院はコペンハーゲンにあるが、陶磁とガラスコースの校舎についてはバルト海のスウェーデンとポーランドの間に位置するデンマーク領のボーンホルム島にある。デンマークの首都であるコペンハーゲンからは飛行機で45分、バスとフェリーを乗り継ぐ場合は3時間半の距離がある。夏季は余暇のための滞在者が増加する一方、冬季はとても静かで日照時間が短くなる。日々、自然の豊かさと景色の美しさに心が満たされる島であり、工芸の作り手が多く住む島でもある。毎年夏にクラフトウィークが開催され、様々な工芸の展覧会が島のいたるところで開かれる。美術館やギャラリーだけではなく工芸の展示やワークショップのための施設、陶磁のレジデンスと展示の複合施設が小さい島の中に存在する。

本学の工芸科陶磁コースとデンマーク王立美術院は2023年に交流協定を締結した。そのため今回の滞在制作は学生の交換留学の初年度と重なることになった。立場としてはゲスト研究者として滞在し、制作場所、材料や焼成費用を無償提供されるといった恵まれた環境であった。工房は24時間使用可能で

あることから早朝から夜遅くまで学生が作業していた。学生の授業はおよそ朝9時ごろから始まり、昼食をはさんで午後3時ごろまで、それ以降は自主制作を行っている。興味深い授業については参観し、フィールドワークにも同行し、それ以外の時間を制作に充てるという生活であった。

2. 制作研究

まず制作研究では、滞在制作をデンマークで行うことでしか得られることができない成果がいくつかあった。

土と紙を組み合わせて制作する作品群である「Cycle of life」では、紙でできた造形物と粘土を組み合わせて成形する方法を用いている。それらは焼成により紙は燃えてなくなり、土は強固になり紙の造形物の痕跡を残す形態をとる。土と紙の組み合わせによる困難さは土が収縮するという特質から生じる。デンマークで使われている土を用いて土と紙を組み合わせて成形する技法を行うと亀裂が入る可能性が高いことから、亀裂を回避するための実験に多くの時間を費やした。実験の結果、形体を観察し土の収縮する方向を捉え、その方向に対して土の補強を入れることで亀裂を防ぐことができた。このことから、これまでの作品よりも形体が少し複雑化するという事に繋がった。性質を理解できている普段使用する土とは異なるヨーロッパの土で破綻のない

焼成が可能となり、作品の新たな展開を見出せたことは大きな成果である。

また上記の作品群に対する考察を深め、釉薬を施すことで痕跡部分に「次の循環への糸口となる生命感を付与する」という発想を得て、作品を試作することができたことから、今後展開させたいと考えている。次に、紙の材料となる紙紐が日本の製品とは異なることに起因し、新しい表情の痕跡を得ることができた点も興味深い。日本の紙紐は撚りが均一であることから紙紐の太さは均一な紙紐であるが、デンマークで入手できた紙紐は撚りが弱いいためか紐の太さが均一ではない。このことから粘土に写し取られる表情についても変化が生じた。日本の紙紐を用いた痕跡はやはり均一であるため人工的印象があるのに対して、デンマークで手に入る紙紐は撚りが甘く不均一であることが粘土に残る紙紐の痕跡に有機的印象が強化されたことが理解できた。以上の制作上の成果や気づきと共に「Cycle of life」は7点を制作した。



さらに現地での滞在によりインスピレーションを受けて「Knot grove」を創作できた点も大きな成果である。

「Knot grove」は日本ではあまり使われることが少ないエクストルーダーという道具による制作方法に影響を受けて発想した作品である。エクストルーダーという道具は押し出し成形ともいえる成形方法で、出口となる切り取られた穴から粘土が押し出されることで形ができる成形方法である。円筒状のか

たちをエクストルーダーでは簡単に成形することができる。この方法から円筒形が伸びてできたような形を想起し、それらが複雑に結び目をつくりながら成長するイメージから「Knot grove」という作品を発想した。ただ実際にはエクストルーダーでは上述のような形態の作品の成形は難しいことから、手びねり技法で制作を行い作品化につながった。この作品は、私の表現において重要な「生命の循環」と「ケルティックノット」や「日本の水引」などにみられる形態に共通性を見出している。二次元的な拡張であるそれらを立体表現においても展開できるのではないかという考えに至り、制作に着手した。ただ残念なことに、この作品の内1点は焼成時に共に入れた学生の大作品複数個が窯の中で爆発するという事態に巻き込まれた。それだけではなく爆発の衝撃で組まれていた棚板や支柱が動き、窯の扉を開ける際に窯に入っていた作品全てと棚板や支柱が総崩れとなる大惨事となり、作品は破損したのである。最終的に「Knot grove」の作品は3点制作した。



次に釉薬研究における成果を取り上げる。釉薬研究の環境が整っていたこともあり重点的に釉薬研究を行い、テストピースを多数制作した。釉薬の原料に関しては、日本ではボールミルという回転する容器に原料と磁器製のボールを共に入れ原料をすり細かくする工程を経るが、デンマークでは粒度の細か

い原料を用いているためかその工程を行わず、原料を混ぜ合わせるのみで釉薬が完成する。その方法による釉薬では、これまで得ることがなかった釉薬の表情を得ることができたので、今後その釉薬を用いて作品制作に生かしたいと考えている。日本とデンマークの原料の取り扱いの違いから、これまで得ることがなかった釉薬の表情を得ることができた点は今後の釉薬研究においてデンマークの原料の取り扱いを釉薬制作の一つの方法として取り入れることで、釉薬表現の幅が大きく広がることが見込める。

以上の制作研究の成果を展覧会という形で発表した。会場はボーンホルム校の近くに美術院の卒業生2名が共同のアトリエ兼ギャラリーを構えており、そのギャラリースペースで行った。「Cycle of life」を7点、「Knot grove」を3点、日本から持参した作品1点を展示した。



3. 教育研究

教育研究として、デンマーク王立美術院のボーンホルム校のいくつかの授業を参観し、フィールドワークに同行した。またデンマーク王立美術院のコペンハーゲン校での陶磁工房やデザイン科の見学を行った。さらに北欧の大学や研究施設を訪問し、施設や教育研究内容を調査した。

ボーンホルム校の陶磁プログラムの1年生のフィールドワークに同行した。学生たちは島内で土、釉薬原料の採取、廃棄物を原料として利用することを目的として収集を行った。この授業は身近な資源を収集し活用することで、枯渇する陶磁器原料の資源に対する意識を高める意図の授業である。現在社会における陶磁器造形に携わる学生にとって、大変意味深いものであり、本学の教育においても取り入れたい内容である。

またカリキュラムの構成については本学とは異なる点が多いが、一つの課題に対し長い期間で研究に取り組めるカリキュラムとなっており、その課題の中で複数の技術や研究を深める要素を学べるように工夫されていることが理解できた。また学生の身体的安全面や機材の使用に関する指導が手厚いことは本学での指導体制にも取り入れたい点である。

コペンハーゲン校の陶磁工房とデザイン科へ訪問し教育内容のヒアリングを行った。陶磁工房は建築とデザインの学生が陶磁を素材として研究する際に使用され、技術職員が在籍しており本学の共通工房のような役割を担っていて、陶磁を専門に学ぶボーンホルム校のそれとはすみ分けがなされていた。

見学の際に紹介された造形素材が特に興味深いものであった。その素材はマッシュルームであり、必要な大きさに急速に成長させることができ、切削などで希望のかたちに造形が可能である。天然のバイオ資源から素材得ることは廃棄する際においても環境負荷が少ないこともあり、今後日本でも活用が期待される素材であると確信した。



4. 陶磁器表現の調査

北欧を中心としたヨーロッパ諸国における陶磁器表現やそれに関連する美術表現の動向調査を2023年10月、12月、2024年2月に分けて行った。

まず10月にスウェーデン、フィンランド、ノルウェー、デンマークの4か国の主要都市での調査を行った。訪問した都市はストックホルムおよびヨーテボリ、グスタフスベリ（スウェーデン）、ヘルシンキ（フィンランド）、オスロ、ケストフォス（ノルウェー）、コペンハーゲン、フムレベック（デンマーク）である。北欧諸国については、デンマーク王立美術院のニーナ教授から紹介を受けた大学や研究施設への訪問を行った。

訪問した施設は、スウェーデン：HDK-Valand（ヨーテボリ）、Konstfack（ストックホルム）、ノルウェー：Kunsthogskolen i Oslo（オスロ）、フィンランド：Arabia Art Depaertment Society（ヘルシンキ）である。直接教員や研究者と面会することができたので今後も交流を継続したいと考えている。

またストックホルムではクラフトウィークが訪問中に開催されており、スウェーデンの工芸作家の展覧会が街中で開催されていたこともあって、より多くの工芸動向について調査することができた。

オスロ大学（Kunsthogskolen i Oslo）では工房に高さ3m奥行3mの窯が設置されており、丁度大物作品の課題を始めるところであった。学生は大物の作品制作を移送用パレットの上で制作を開始していた。大学でこの規模の窯を有し稼働していることが学生の表現をより豊かにしていることは間違いのない。

Arabia Art Depaertment Societyでは作家4名のアトリエを訪問し作品制作についての話を聞くことができた。

12月と2月の調査において訪問した都市は、ロンドン、ストックオントレント（イギリス）、ベルリン、ノイス、ケルン、デュッセルドルフ、ハンブルグ（ドイツ）、アムステルダム、ハーグ、レーワルデン、フローニンゲン、ハッセルト（オランダ）、ブリュッセル、ラ・

ルビエール、モンス、アントワープ（ベルギー）、ミゼルフアート、コリング（デンマーク）である。装飾美術館や工芸博物館、陶磁美術館、陶磁産地の博物館や工場などを訪問した。

北欧諸国への調査旅行において、今後も交流が継続できる人脈形成ができたことは制作研究及び教育研究においても大きな成果である。また陶磁造形表現や関連する美術表現の動向調査に関しては、ジェンダーや環境の問題への意識がいずれの国においても高いといえる。また工芸の技術や素材が有する表現媒体としての今日における有用性に関しても制作研究、教育研究ともに大きな教示を受けることができた。

一方デンマークや北欧諸国においては、近隣諸国と比較して素材である土や釉薬の表情など素材特有の性質を生かした表現などが日本と同様に多いことが印象深い。日本と北欧諸国の美術表現における自然と人間との対峙の仕方に共通性が見られた。その一方で、色彩の面ではカラフルな表現から味わいある深みのある色味まで幅広い色味を活用した表現が多彩である。またアート表現としての陶磁器表現の在り方が日本のいわゆるオブジェにみられるような単一で抱えられることができる大きさに留まることなく空間に対して作品を配置して表現するインスタレーションや大型のものや絵画的表現が多く、映像作品やパフォーマンスなどに展開するものもある。美術表現における一つの在り方として陶磁器が用いられるといった傾向が見られた。

附記

本研究は小笠原財団及びスカンジナビア笹川財団の助成を受けたものである。

（みやなが・はるか 工芸科／陶磁）
（2024年11月7日 受理）